

『東京日々新聞』における石炭関係主要記事（III）

斉藤，俊彦
NHK資料センター

<https://doi.org/10.15017/13574>

出版情報：エネルギー史研究：石炭を中心として. 3, pp.58-61, 1974-05-27. エネルギー史研究会
バージョン：
権利関係：

『東京日々新聞』における石炭関係主要記事(Ⅲ)

齋藤俊彦

東京日々 明十三・四・七

○去る四日午前九時長崎県下高島石炭坑の第二坑中より瓦斯破裂し坑夫の死亡五十五人怪我六十人あり併しマブにハ少しも損害なしとの電報あり

東京日々 明十三・四・十七

○去る四日高島炭坑にて坑中の瓦斯破裂せし事ハ電報に依りて前号に記せしがいま長崎よりの報道を得たり同日急報の達するや折ふし後藤家次郎君にハ長崎に居られしかバ直ちに数名の医師を伴ひて炭坑に赴かれまづ坑夫の死者を吊ひ傷者を療治し其の日の内に取片付け翌五日にハ全く平常に復したりと其の詳細ハ坑主後藤君より長崎県令への届け書に詳しけれバ左に載す

東京日々 明十三・六・九

○茨城県下常州久慈郡御岩山の銅山ハ元と佐竹領にて其頃ハ盛んに開鑿せしか凡そ百ヶ所ほど堀りし跡今にあり其後水戸領となりてより如何の訳にや長らく休業せしが今ど有志の尽力にて試堀を出願せしかバ山尾工部卿と工部大学の鉱山生徒并に御雇外国教師も出張ありて実検せられしに銅を十分に含有する由なれば是に氣を得て旧区长の滑川某外三十七名の金満家が奮発して同郡多賀郡の鉄山石炭山の試堀とを併せて銅鉄石炭三鉱業会社を開設せんとて方今周旋中のよし斯れバ美結果を得るハ応に遠きにあらざるべしと云ふ

本月四日午前九時高島炭山第二坑内蒸気卸し東廿一片磐中より瓦斯破裂し為めに坑夫門監等の即死する者四十七名疵傷軽重を合し四十七名坑用馬の死する八頭に及べり其死傷たるや蓋し破裂の弾力に斃れ或ハ破裂後坑中に充塞する炭酸瓦斯の気烟に触れ又ハ昏迷狼狽して途を失ひ岩石等に衝突破砕せしものならん右ハ坑内より引揚るや直に出張巡査の検視を受け死亡ハ埋葬せしめ疵傷ハ同島に在る病院又ハ各自の納屋に送り夫々治療を致させ居候抑此の破裂の原因を採求するに該片盤の一隅にて嘗て過量の瓦斯を噴出する部分あり為に目標を取立て常に出入を厳禁したるに坑夫猥りに進入せしものにや災後其部中に一燈器と一坑夫の死體を見出したるを以て此の災害の原因と認め候尤も坑道ハ聊かの損所も是れ

○当局所産コークス及コールドタル満壱ケ年間一手売捌方入札ヲ以テ約定取結度候間御望ミノ方ハ(横浜区住居ノ人ニ限ル)本月十五日迄ニ入札書御差出有之度候也
但一品ヲ入札スルモ差支無之候尚約定書并入札手續等ハ来局ノ上御一覽可被下候
明治十三年六月九日 横浜瓦斯局

東京日々 明十三・七・廿一

○高島の石炭ハこの春より諸港に囤ひ置き品多きより一時売口わらく随つて直段も下落したれば其後ハ採掘せし石炭を山元に儲へ置

て売さざりしに先ごろ長崎に在留の魯国人が残らず買取り浦潮期徳に運送せしとぞ其の代価ハ凡そ五十万円なりと云ふ蓋し清国との紛紜に付て予備の為に斯く多数の石炭を買込みしものか孰れにも坑主ハ莫大の商ひ高なりしと頃日出京の長崎人の咄せり

東京日々 明十三・十・五

○二三日前に後藤象二郎君の我が社長を訪へれし折り近来我らが身の上に附てハ毀与褒貶百出して様々の事どもを新聞紙にて云ひ触せども孰れも歯牙に懸るにも足らぬ浮説なれば耳辺の蚊擾とも聞做ずして棄て措きたるがたゞ去る十一日の扶桑新誌に云へる我らが藤田組の贋札の確証を大坂なる鳥尾より聞得て告発する為に上京し大隈と其を密議したり又我が上京ハ夫のみならず高島坑にハ兼て鹿兒島人の加入するが近来長州人の取立たる石炭坑の兎角に我が炭坑の邪魔をすれば此ほど官途に紛議の起りしを幸ひ夫をも政府に持出したる云々と記したるハ人を誣るも亦た太甚だしとや云ふべき今たび我らが上京するに神戸にて二日ほどの船待すれば其間に兼て好める西京の鮎を試みんとて汽車にて赴きしに其日に電報ありて兼ての期より早々船の出帆すると云ふに驚かされ又々汽車にて急ぎ神戸へ下りたれば遂に大坂へハ得寄らずされば鳥尾に遇て藤田組の事実を聞得べき様もなくまた同人にハ実に数年来面会せず又た上京の後ち大隈と右の密事を議したりと云ふも是また訛りにて去月の十六日にか姪子橋外なる邸を音信しに折ふし門前にハ車馬充盈て来客の込合ひ居る様子なれば立帰らんと人せしかど然とて此まで来しものと思ひて取次して云ひ入れたるに頓て面会ハしたるものゝ唯だ時候の寒暖を一通り演しのみにて十分間とハ語らざりき又た新誌に云ふ長州人の取立てたる炭坑とハ想ふに三池のことなるべし元来我が高島と

此の三池とハ炭質の異なるば用所も亦た異にして彼ハ彼が商売をなし我は我が売捌をなして初より相関からずされば彼此の間に紛議の起るべき様もなく商売の妨げをなす筈もなし殊に我が社に鹿兒島人の社員たるもの一人も無きハまた此事の謬説たるを証明するに足るべきか事の虚実ハ右の如し我ら不敏なりとハ雖ども亦た他の隠悪を許きて人を罪に陥れんとする残忍の人にあらざる又我が営業に如何なる妨害をあたふるとも其が艱難を機として弱みに狙込むが如き卑怯なる男ならぬハ老兄も能く知る処ろならん我ハ我が榮譽を傷はれしを恨むにあらざる世の記者が余りに人物を知らざるを憫れむのみまた其前後の横浜毎日新聞にも我らが三出会して或ハ夜に入るまで何事をか密議せしなど載せられたれども其はた痕跡のなき訛聞たるハ右の咄しにて明かなり我らも一年振にて出府したれば用事もありまた談話もあり旧知已朋友なる当時の參議を音信と思へども右らの如く痛くもなき腹を探られて世の中の疑惑を来すことの否さに拠ろなく遇ねばならぬ人にすら未だ遇はず誠に迷惑千萬の事どもなりと歎息して語られたれば社長も我が同業にて自から新聞記者と誇る人々が時勢を知らず事実を知らず人物をも知らず濫りに事物の論評を下だし其所行をすらは是非するハ尤も片腹痛きことにて其愚を憫むとの一段にいたつてハ貴下と同感に候と答へたるよし抑も後藤君の局量大いにして小事に蟻蝮せられざるハ従來の事業を見てもこれに諒すべく他の艱難を時として不義の利を謀り人の罪惡を發きて快よしとする市井の小兒と同じからざるハ少しく世間と交際するものゝ熟知する処ろなるに斯る訛伝を信じて紙上に筆するは畢竟意を用ふることの粗なるに出でし過ちか我々ハこれらの記者の為に惜まざるを得ず

東京日々 明十三・十一・八

○去る五日長崎県より電報にて昨夜午後九時ごろ高島石炭坑内より出火し火勢猛烈いまだ鎮火の模様なしとの届けありしと又た某新聞にハ坑夫が俄かに沸騰し少々放火せしが未だ鎮静の模様知れざるよしの届けありしと見えたるが何れが信なるや

東京日々 明十三・十一・十

○高島炭坑の出火の電報へ前号に記せしが猶ほ聞くに右ハ全く坑夫の暴発にて坑工の器械を毀ち所々に放火し詰合の巡査にてハ制圧の届かざる旨県庁へ報知せしかバ直ちに数十名の巡査を出張せしめられしに暴徒ら其の来るを覗ひ海岸に出で、瓦石を投げ上陸を防ぎたれば余義なく銃器を用ひて漸くに威し付け上陸して専ばら鎮撫中なりとの趣きを世間にて云ひ触らすに付き本社より三十間堀の炭坑舎へ問合せたるに前の工夫暴動云々の事ハ長崎より電報ありしかども其余の事ハいまだ何とも申来らずとの返答なり然らば此の風聞も未だ信を措き難きものか

東京日々 明十三・十一・十二

○横浜居留の支那人ハ先頃より千葉県下の海浜の村々へ人を出して田作を買縮ることハ夥しき金高なるが夫故に昨今田作ハ払底にて百斤八円余の直段なりと又た同国人ハ茨城県下久慈郡内の山より出る石炭を買入れて本国へ輸送するもの多しと聞けり

東京日々 明十三・十一・十五

○後藤象二郎君ハ一日昨日出帆の隅田丸にて長崎へ赴かれたり多ぶん高島炭坑の事件に附てなるべし

東京日々 明十三・十一・廿六

○又同使にて幌内炭礦の為に架設せらるる鉄道ハ小樽港の手宮といふ所より工を起し最はや星置まで成就し手宮より銭函の間に本月の一日より汽車の運転も差支へなくなりたる趣きに聞き居たるが一日廿四日に其筋へ達したる電報にてハ既に札幌の空知通りまで架設の工を竣れりと云へり手宮より幌内までハ大約廿三里の地なるにその半途まで成就したるハ迅速のこと云ふべし

東京日々 明十三・十一・廿七

○三重県下安濃郡綿打町の三好某ハ我国にて石炭の需用すくなきを憂へて先頃より地方の有志者と謀りて資金三万余円にて潤国社と云ふを設け社員を四方に出して廿余ヶ所の炭鉱を買入れ其うち既に開堀に着手せしもあれば去る廿二日社員一同集會して開鉱式を執行せしとのことなるが元來勢州地方ハ随分炭鉱に富みたれば後々此業の盛大に至らば人民の便益は大かたならざるべしと同地よりの報知あり

東京日々 明十三・十二・三

○諸省附屬の諸工場のうち御払下を願出たるハ末だ三池鉱山のみなるが則ち同鉱山払下の事に付工部省より太政官へ伺中なりとその出願者ハ大坂府平民某々等数名なりと聞けり

東京日々 明十三・十二・七

○先ごろ高島炭坑を騒がせし坑夫并に其巨魁ども彼の折り召捕れて近々処刑になるべしと聞けり扱この暴動の原と云ふハ元と同坑ハ炭質も良く出高も多く我国にて屈指の良坑なれども年来の大借なる上

に近來上海その外にても石炭相場の下落したるより維持の方六づかしく依て去ころ社則を改革して在來の雇人の中に懶惰のもの又不用の人員等を放逐し或ハ減給しまた用便に足るべきものを東京横浜より雇入れなどして専ら冗費を省くことをのみ要としたれば社中の會計もやゝ立ち掛りたるに右の放逐減給等の者がいたく恨みて手を換へ品を替へ坑夫を煽動して今に貴さまらの方にも減給と放逐のお櫃が廻るぞ早く身の用心せよと云ひ触らせしに坑夫どもハ鈍くも謀られて無体に我らの雇賃を減されてハ食ひ続けずされバとて穴堀の外に身過をすべき仕事もなしいつその腐れ騒動を始めて其紛れに金錢を攫ひ他郷へ走らんなど謀し合せて或る夜坑内に火を放ちて騒ぎ立てたれば残る者ども其尾に附て暴れ出し竟に斯る騒動に及びたるなりといふされバ此の暴挙の為に炭坑舎の損失も少なからず殊に商売向の事に付きても競争する事あり或ハ故障をなすことなどありて折角の改革も其功を見るまでにハ余程の骨折なるべし到底此上ハ社中の有力者が非常の力らを尽すにあらざれば維持方ハ甚だ難かるべしと云へり我々局外の者といへども日本の為にハかく坑山の繁昌して廃業などの不幸を見ざるべきを願ふのみ

東京日々 明十三・十二・廿

○先に高島炭坑暴動の顛末を略記せしが其原固ハ矢はり前記の如く今春以來坑主後藤君が長崎に出張して大に社則を改ため悪弊を除きまた社員役夫等をも黜陟せしがその不正にして黜けられたる輩ハ其後是以までの如き私利を営むを得ざるより竊かに坑主を恨みて役夫らを煽動し終に此の暴挙をなさしめたるなりと云ふ其折の景況ハ坑夫ら四五百人が手々に得物を持って坑外の機械を打毀し同社の出張所と社員の住宅に乱入して金庫を開き衣類その他目欲しき品々を奪ひて

所々に放火し其紛れに頭立たる者五六十人ハ小舟に乗りて沖の島の方へ漕去りたるが此に乗後れたる者(此中にも巨魁あり)數十人を其筋にて召捕られ昨今糺問中とのよし抑も此社全体の盛衰を論ぜんに創立以來百余万円の大借あれバ社主社員みな其人を得て坑業の盛大なるも元利金の返済に逐はれて其困難謂ふべからざるものあり殊に此の暴動一件に付てハ殆ど十万円にも及ぶべき損害を受けたれば艱難ハ更に一層を増して尋常の考へをもて見る時ハ迎も維持方の六かしき景況ありされば今非常の施策を以て挽回するに非ざるよりハ東洋第一の炭坑を空しく廃業に至らしめんかと痛歎するもの少なからず又同社の會計をして此暴挙の為に弥々窮困に至らしめしと云ふが実ならバかの坑夫らを煽動せし者どもは独り坑主の罪人のみならず亦た日本全国財政上の罪人とも云ふべきか